

台湾の医学史の本で見られる“日本”

王 敏 東

(台湾) 銘伝大学

1. はじめに

医学史が台湾を含めた多くの国の医学部の人文または教養の科目として教授されているという¹⁾。ところで、台湾にはそのような授業の教材として用い得る医学史の本はどのくらいあるだろうか。また、たとえば作者、出版地、内容などの内訳はそれぞれどうなっているだろうか。とくに、近代医療体系の大部分が日本人の手によって確立された台湾において、医学史の本で“日本”がどう取り扱われているかは興味深い。

本稿はこのような状況を鑑み、台湾の医学史の本で見られる“日本”を検討したものである。

2. 調査範囲及び時間

本稿で検討する医学史の本は、日本の植民地でなくなってからの、つまり戦後の台湾で見られる、世界における医学史の通史を中国語で述べたもの(電子資料を除外)とする。したがって、たとえば『19世紀医学科学史』(2000; 复旦大学出版社)のような特定の年代のもの、『中国医学史話』(1982; 中国医薬研究所)のような特定の地域の医学史を論じるもの、『医学的栄光と陰影: 従郵票看医学史』(2000; 中国医薬科技)のような特定の資料・素材に基づいて検討したものや、『程之范医史文選』(2004; 北京大学医学出版社)のような論文集は対象外とする。

また、調査範囲は、台湾の国家図書館の「NBINet 聯合目錄」(国家図書館全館の書籍及び、図書館間相互協力に参加する図書館76箇所の書籍の書誌情報)及び、医学科がある大学²⁾の図書館、の大型の図書館とした。調査時間は2011年2~3月である。

3. 台湾で見られる医学史の本

前記(2. 調査範囲及び時間)の手順で調べると、以下(1~31年代順)のような医学史の本が台湾の各図書館に所蔵されていることが明らかになった。

1. 杜聡明(1959)『中西医学史略』高雄: 高雄医学院
2. Erwin H. Ackerknecht 撰; 戴榮鈞訳(1966)『医学史概論』台北市: 中国医薬研究所
3. 杜聡明(1966)『中西医学史略』台北: 中華大典編印会
4. 程瀚章編(1966)『医学史話(一)(二)』増訂小学生文庫
5. 石川光昭著; 沐良訳(1968)『医学史話』台北市: 台湾商務
6. 李廷安(1977台一版(1947年版影印))『中外医学史概論』台北市: 台湾商務
7. William A.R Thomson 撰; 駱惠銘訳(1978)『医学史話』台中市: 自然雜誌
8. 貝特曼(Otto L. Bettmann) 撰; 李師鄭編訳(1980)『世界医学史話』台北市: 聯經出版
9. Albert S. Lyons, R. Joseph Petrucelli 著; 故郷編輯委員会訳著(1982)『図説医学的歴史』台北市: 故郷
10. 李経緯・程之范主編(1987)『中国医学百科全书 医学史』上海市: 上海科学技術出版社出版
11. 李煥燊(1987)『医学史話』台北市: 国防医学雜誌社
12. 郭成圩主編; 郭成圩・王羽・寧学旗・胡凡・張敏編(1987)『医学史教程』成都市: 四川科

- 学技術社出版
13. 程之范・宋之琪編著(1990)『簡明医学史』北京市:北京医科大学・中国協和医科大学聯合出版社
 14. 鄭富元・林受銓編著(1999)『世界医学史 The Medical History of World』台北市:学者出版社
 15. 羅伊・波特(Roy Porter)著;張大慶訳(2000)『劍橋医学史』長春市
 16. 江流主編;朱建平・黄健著(2000)『医学史話』中国大百科全書出版社
 17. 江流主編;朱建平・黄健著(2003)『医学史話』台北市:国家出版社
 18. (イタリア)カスチ廖尼(Arturo Castiglioni)著;程之范主訳(2003)『医学史』桂林:広西師範大学出版社
 19. 張大慶主編(2003)『医学史 A HISTORY OF MEDICINE』北京市:北京大学医学出版社
 20. 羅伯特・瑪格塔(Roberto Margotta)著;李城訳(2003)『医学的歴史』太原市:希望出版社
 21. 若依・波特(Roy Porter)著;王道還訳(2005)『医学簡史』台北市:商周出版
 22. 羅伯托・瑪格塔(Roberto Margotta)著;李城訳(2005)『医学的歴史』台北市:究竟出版
 23. 楊建宇等主編(2006)『医学史』北京:中医古籍出版社
 24. 張大慶著(2007)『医学史十五講』北京:北京大学出版社
 25. 羅伊・波特(Roy Porter)主編;張大慶主訳(2007修訂版)『劍橋挿図医学史』濟南市:山東畫報出版社
 26. 羅伊・波特(Roy Porter)主編;張大慶主訳(2008)『劍橋挿図医学史』台北市:如果・大雁文化出版
 27. 約翰.V.皮克斯通(John V. Pickstone)著;陳朝勇訳(2008)『認識方式:一種新的科学,技術和医学史』上海市:上海科技教育
 28. 洛伊斯.N.瑪格納著;劉学礼主訳(2009第二版)『医学史』上海:上海人民出版社
 29. 江漢声著(2009)『歴史教我的医学 16堂經典医学史』台北市:原水文化出版
 30. 茨木保著;賴敏裕訳(2010)『漫画医学史』台北市:合記
 31. (美)約翰・伯納姆(John. C. Burnham)著;顏宜葳訳(2010)『什么是医学史』北京:北京大学出版社

4. 台湾で見られる医学史の本の内訳

前節(3. 台湾で見られる医学史の本)でリストアップした台湾で見られる医学史の本の, 出版時期, 作者(または訳者)の出身地, 大体の字数, そして“日本”についてのどの程度触れられているかということについての詳細は表1の通りである。

表1 台湾で見られる医学史の本の, 出版時期・作者(または訳者)の出身地・分量(字数)・“日本”に関する記述量の内訳

本(番号)	出版年	作者	訳者	量	“日本”が触れられた程度	備考
1	1959	台湾人(医学専門)	—	35字×36行×537頁	42頁.	
2	1966	Erwin H. Ackerknecht(医学専門)	台湾人(医学専門)	35字×32行×135頁	「序」に数文程度.	
3	1966	台湾人(医学専門)	—	35字×36行×532頁	42頁.	1と全く同じだが, 版権の頁は違う.
4	1966	中国人	—	25字×11行×97頁	ほとんどなし.	
5	1968	日本人	台湾人	39字×12行×222頁	数文程度.	
6	1977	中国大陸(旧)(医学専門)	—	28字×26行×51頁	数文程度.	
7	1978	William A. R Thomson	台湾人	34字×33行×77頁	数文程度.	
8	1980	貝特曼(Otto L. Bettmann)	台湾人(記者出身)	32字×31行×579頁	ほとんどなし.	

本 (番号)	出版年	作者	訳者	量	“日本”が 触れられた程度	備考
9	1982	Albert S. Lyons, R. Joseph Petrucelli (医学専門)	台湾人 (医学専門の訳者委員たち)	32字×47行×636頁	ごく僅か (中国医学が日本に伝わった, ということ, 図込み数頁に渡って述べている).	
10	1987	中国大陸人	—	24字×2欄×50行×462頁 (「世界医学史」は172頁350項目)	(「日本の医学」「北里柴三郎」「野口英世」などの12項目).	簡体字版
11	1987	台湾人 (医学専門)	—	30字×26行×297頁		
12	1987	中国大陸人	—	28字×27行×403頁	1頁ぐらい.	簡体字版
13	1990	中国大陸人	—	24字×27行×122頁		簡体字版
14	1999	台湾人 (日本の大学院を 通っていた) (医学専門・ 文学専門)	—	15字×17行×254頁	24頁 (1999年当時活躍していた日本の医学者の紹介が含まれている).	
15	2000	羅伊・波特 (Porter, Roy) (医学社会史教授)	中国大陸人 (医学専門)	22字×28行×704頁	ほとんどなし.	簡体字版
16	2000	中国大陸人	—	22字×26行×192頁	4頁 (鑑真).	簡体字版内容は中国医学史のみ
17	2003	中国大陸人	—	38字×14行×212頁	4頁 (鑑真).	16の繁体字版
18	2003	(イタリア) カスチ廖 尼 (Arturo Castiglioni) (医学専門・医学史専門 家)	中国大陸人	30字×33行×1146頁	見当たらない.	簡体字版
19	2003	中国大陸人 (医学専門)	—	39字×38行×244頁	ほとんどなし.	簡体字版
20	2003	羅伯特・マゴッタ (Roberto Margotta)	中国大陸人	46字×37行×191頁 (カラーの図が多い)	数文程度.	簡体字版
21	2005	若依・波特 (Roy Porter)	台湾人	26字×18行×271頁		
22	2005	羅伯托・マゴッタ (Roberto Margotta)	中国大陸人	38字×34行×190頁 (カラーの図が多い)	数文程度.	20の繁体字版; 部分の図が置かれた場所が異なっている.
23	2006	中国大陸人	—	39字×39行×274頁	見当たらない.	簡体字版
24	2007	中国大陸人 (医学専門)	—	28字×30行×289頁	ほとんどなし.	簡体字版
25	2007	羅伊・波特 (Roy Porter) (医学史件研究所医学社会史教授)	中国大陸人 (医学専門)	48字×40行×317頁	ほとんどなし.	簡体字版
26	2008	羅伊・波特 (Roy Porter) (医学史件研究所医学社会史教授)	中国大陸人 (医学専門)	42字×35行×351頁	ほとんどなし.	25の繁体字版 ³⁾
27	2008	約翰・V.ピクストーン (John V. Pickstone) (生理学, 哲学専門)	中国大陸人	29字×28行×266頁	見当たらない.	簡体字版
28	2009	ロイス・N.マゴッタ (Lois, N.M.) (理学専門)	中国大陸人	32字×32行×577頁	ほとんどなし.	簡体字版
29	2009	台湾人 (医学専門)	—	33字×29行×255頁	(1章) 14頁.	
30	2010	日本人 (医学専門)	日本滞在の台湾人 (医学専門)	353頁 (52章)	(11章) 66頁.	漫画
31	2010	(美) 約翰・伯納姆 (John C. Burnham)	中国大陸人	32字×28行×158頁	数文程度.	簡体字版

まず、全31点という数は必ずしも多いとは言えない。

出版された年代については1950年代1点、60年代4点、70年代2点、80年代5点、90年代2点、そして、今世紀に入って十何点と大幅に増えたことが観察できた。

次に作者の出身地に注目すると、台湾人自らの著作はほんの数点しかなく、それに対して翻訳されたものが大半であることが分かる。訳者は台湾人ばかりでなく、中国大陸人もかなりの割合を占めている。つまり、台湾では中国大陸人が訳した簡体字のものをそのまま利用していることがうかがえる。そのようなものは今世紀に出版されたものに集中している。台湾で見られる医学史の本に関していえば、日本語の原典はいずれも台湾人によって訳されており、西洋語の原典はその多くを中国大陸人が訳している。また、作者（または訳者）の専門または出身学科を見ると、医学を専門とする者が多く、哲学か社会学専門がある程度おり⁴⁾、新聞記者も含まれる⁵⁾。これで、医学史に携わる者の専門分野の分布もうかがえる。

また、本の分量は、“字×行×頁”で計算すれば⁶⁾、大体推測できる。もっとも、25のような医学にかかわる貴重な古代の絵などを大量に取り入れられているものや、30のような漫画で表現されているものもある。

最後に、これらの医学史の本で“日本”について述べられた分量は、全体的に少ないと言わざるを得ない。以下、第五節はこの点についても述べる。

5. 台湾の医学史の本で見られる “日本”の内訳

当然のようだが、どの地域の医学史を本に入れるかは作者（または訳者）の出身地や学経歴に大きく左右されていると思われる。今回の調査でもそのような関連性が見られた。本節は作者（または訳者）の出身地や学経歴とあわせながら、「量」、「内容」と「間違い」という3つの視点から台湾の医学史の本で見られる“日本”を見ていく。

5.1. 量

原典が洋語のものは“日本”についてはほとんど触れていない。触れられても、何かをめぐって論じる時に、日本の何らかのことが例としてあげられている程度が多い。もっとも、現代医学は基本的に近代医学の成果に立脚するものであり、近代医学、即ち西洋医学が大きな役割を果たしていることは間違いない。医学以外の政治、軍事、経済などの面においても、欧米におけるとくに文芸復興（ルネサンス）以来の発展は人類全体の今に至る進展に大きく影響を与えている。医学の根底にある哲学、価値観を含めた思想の追求や、19世紀における社会学的な視点での医学への探求のように、医学史の領域を豊かにしたという面では確かに西洋が欠かせない存在である。が、ルネサンスよりはるかに古い時代の医学に関する記録を有する日本に関して、これまでの医学史があまり紙面を割いていないことは問題だと思われる。とくにたとえば、1895～1945年に日本の所有下にあった台湾の医学は、ほとんど全面的に日本のものを継承していたので、台湾で医学史云々を論じる折に、日本を無視するわけにはいかない。それと関連するの、台湾人が書いた医学史の本（1, 3, 14, 29）では比較的多くのスペースが日本のことの紹介に使われている。1と3の作者は台湾の日本領有時代に日本人が作った台北医学校で医学教育を受け、のちに京都大学に留学し、はじめて博士号をとった台湾人の杜聰明氏である⁷⁾。いわば日本の医学教育体系で育った氏のことだから、台湾で医学史を取り上げるなら、“日本”を外すわけにはいかなかったのであろう。また、29の作者は、台北帝国大学を前身とする、台湾大学医学部の出身（1970年代）で、父親が戦前東京帝国大学を卒業し、戦後台湾大学医学部に勤めていた、というように日本（の医学）とも縁が深いと言ってよさろう。なお、14の2人の作者はそれぞれ東京医科歯科大学とお茶の水女子大学で勉強した歴があり、医学史をまとめる際に、意識的に日本のことを取り入れることがある⁸⁾。

一方、16, 17の『医学史話』は書名だけでは分からないが、実は中国医学史を中心に述べた書物

表2 各医学史の本で見られた“日本”の内訳

本 (番号)	“日本”に関するタイトル
1	「日本漢方医学」という章の「日本漢方医学之伝入」「日本本草医学之発達」「日本漢方医学之概論」「日本漢方医学之変遷 大塚敬節」という4節と、「專題雜録」という章の下の「日本医学教育之演進」「中日現代医学教育之起源」「台湾医学教育之発展」の3節.
3	「日本漢方医学」という章の「日本漢方医学之伝入」「日本本草医学之発達」「日本漢方医学之概論」「日本漢方医学之変遷 大塚敬節」という4節と、「專題雜録」という章の下の「日本医学教育之演進」「中日現代医学教育之起源」「台湾医学教育之発展」の3節.
10	「中日医学交流」「日本の医学」「曲直瀬道三」「多紀元簡」「浅田宗伯」「山極勝三郎」「富士川游」「志賀潔」「秦佐八郎」「北里柴三郎」「鈴木梅太郎」「野口英世」という12項目.
14	「革新医学期」という章の下に「日本」の節があり、「貝原益軒、吉益東洞、山協東洋、杉田玄白、華岡青洲、緒方洪庵、明治天皇、BERTSU・SCURIBA、北里柴三郎、野口英世、長谷川泰、志賀潔、藤野恆三郎、高峰謙吉、田原淳、秦佐八郎、桂田富士郎、稲田龍吉、山極勝三郎、鈴木梅太郎、佐々木隆興・吉田富三、青山胤通」が取り上げられており、「現代医学期」という章の下の「日本」の節では「村上元孝、沖中重雄、江橋節郎、梅澤濱夫、佐野圭司、高久史磨、花房秀三郎、利根川進、MISHITSUKA, Y.T (西塚泰美)、MATSUDA, M.H (松田守弘)、OTSUKA, M.N (大塚正徳)、KISIMOTO, T.M (岸本忠三)、HONJO, T (本庶佑)、TAKEICHI, M.T (竹市雅俊)、ITO, M.O (伊藤正男)、堀田凱樹・細穀俊彦、三木哲郎、柳澤正史、成宮周」について触れられている.
29	「無心挿柳——近代日本医学対台湾医学的影響」という章.
30	「日本医学の歩み1 中国医学の流入~解剖学の目覚め」「日本医学の歩み2 南蛮医学と紅毛医学~蘭学の誕生」「日本医学の歩み3 杉田玄白と『解体新書』」「華岡青洲1 世界初の全身麻酔手術」「華岡青洲2 その妻、加恵」「日本医学の歩み4 シーボルトと鳴滝塾」「日本医学の歩み5 幕末 蘭方医と漢方医の闘い」「北里柴三郎1 血清療法誕生」「北里柴三郎2 “日本近代医学の父”」「野口英世1 野口“英世”誕生」「野口英世2 “私にはわからない”」の計11章 ⁹⁾ .

である。その中で鑑真に関する紹介に4頁を割いている。

他方、原典が日本語である30は当然ながら日本の医学に関することが比較的多く、全体の2割前後を占めており¹⁰⁾、今回の調査範囲内で最も高い比率となっている。

5.2. 内容

前掲表1と前節(5.1.量)で示したように、各医学史の本に“日本”に関する記述の量は多くはない。この限られた分量(字数)に表現された日本に関する内容を示すと表2のようになる。

表2で分かるように、台湾大学出身の台湾人作者の著書(1, 3, 29)には日本が台湾医学に進出したことが必ず取り上げられている。それに対して、中国大陸の10, 日本の30, そして日本の大学院に通っていた台湾人作者の14にはそのようなこだわりは見当たらない。これは、作者の学歴は医学史著書の内容と大きくかかわっていることを改めて物語っている。つまり、台湾大学を出た人は日本にこだわりがあり、中国や日本の大学を出た人はこだわらない、というわけである。

筆者は台湾で医学史を論じたり、医学史を教授したりする場合に、日本を無視してはいけないと主張する。それは冒頭でも述べたように、台湾における近代医療体系の大部分が日本人の手によって確立されたからである。

5.3. 間違い

台湾人が日本(語)の資料を利用するにあたり、日本語が分からないことや、日本に対する知識が足りないことに起因した間違いをよく見かける¹¹⁾。

今回の調査ではまず、ミスプリントが見られた。14の「細穀俊彦」、29の「福沢諭吉」はそのようなミスで、中国語の同音語による間違いである¹²⁾。また、29で山田大陸著・王蘊潔訳(2004)を引用する時に作者名を「山田大陸」と間違えているのは字形が似ていることによるものである。

6. 終わりに

以上の検討を通して、以下のことが分かった。

まず、台湾で見られる医学史の本の量は豊かでない。この限られた分量の医学史の著書には、西

洋人の原作を中国大陸人が中国語に訳した物が多くある。このような物では、“日本”についてはほとんど触れられていない。一方、日本語の著書の中国語訳本や日本とかかわりが深い台湾人作者が書いた物も見られる。このような物では、“日本”が占める割合は相対的に多い。が、日本人作者と台湾人作者ではそれぞれ立場・視点が違うので、医学史の本に取り入れる内容も異なっている。たとえば、台湾人作者は台湾の日本統治期を重要視している。また、日本語に熟達していない台湾人作者については、日本語の資料を正確に把握していない現象が見られる。

謝辞

本稿における資料収集に関し、銘傳大学応用日本語学科の郭晏汝、蔡玉琳両氏及び台湾大学医学部付属病院耳鼻咽喉科の許巍鐘氏のご協力をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) たとえば中国大陸で出版された『医学史』(2009第二版：訳者前言)などで、中国大陸の多くの医学部で開講されていることに触れられている。また、台湾でも、たとえば輔仁大学、国防医学院などで開講されている。
- 2) それぞれ国防医学部院、慈済大学、成功大学、台北医学大学、台湾大学、高雄医学大学、中国医薬大学、中山医学大学、長庚大学、馬偕医学院、輔仁大学、陽明大学である。
- 3) 明記されていないが、25の繁体字版だと思われる。訳者8名はすべて25の訳者と同じで、審査・校訂者の名前だけが25のと異なっている。本全体において、25との違いは訳者(張大慶)についての簡単な紹介や、台湾の元国防医学院院長・2011年11月現在台湾国防部軍医局局长(張徳明)が書いた推薦序の有無、台湾で用いられている言葉遣いへの修正(たとえば第四章「初級保健」を「基層医療」に)、図の大きさや位置の調整、付録の変更(たとえば25に注が本の後最後にまとめられているが、26は各該当頁の下に位置するようにされている)程度である。
- 4) たとえば27の著者が哲学の博士号を持っており、25の著者と訳者が共に社会学(社会史)に詳しい。
- 5) 8の訳者の鄭である。

- 6) 図、表などが含まれるものがあるが、概算ということで、その点については考慮しない。
- 7) 日本留学を終えた後、台北帝国大学医学部に勤め、終戦時に日本より台北帝国大学医学部を接収する国民党政府の代表でもあった。
- 8) ちなみに、14の作者の1人鄭の『健康医学』(2000；匯華図書)という著書に日本のことも多く入れられている。
- 9) 以上のタイトルは中国語訳本でなく、日本語原典による。
- 10) その他、中国の医学に関する記述が2%を占めている他は、すべて西洋医学に関するものである。
- 11) たとえばRichard P. Feynman (1988)『What Do You Care What Other People Think? Further Adventures of a Curious Character』の中国語訳本である『你管別人怎麼想—科学奇才費曼博士』(1996二版第2次印刷：91)で「能登半島」(英語原典は「Noto Peninsula」p.79)を「野藤半島」と間違えたが、2005年の第四版で修正している。また、『牙医的故事』(2005：89-91)に「鎌倉時代」を「鎌倉時代」、「後鳥羽天皇」を「鳥雨天皇」、『解体新書』のローマ字表記を「Katai shinsho」、その原著をドイツ語だとしているような間違いも見られる。なお、王・蘇・許(2009)、王(2011)も台湾の日本統治期の資料が現代台湾人によって誤用された事例に触れている。
- 12) 中国語において「穀」と「谷」、「論」と「諭」は同音である。

参考文献

- Richard P. Feynman. What Do You Care What Other People Think? Further Adventures of a Curious Character. Penguin Books Canada Ltd.. 1988. p.79
- Richard P. Feynman 著；尹萍・王碧訳。你管別人怎麼想——科学奇才費曼博士。台北：天下文化出版；1996. p.79
- 山田大隆著・王蘊潔訳。從故事看科学。台北：世潮出版；2004. p.303
- 馬文・林格(Malvin E. Ring)著・陳銘助訳。牙医的故事(Dentistry: An Illustrated History)。台北：辺城出版；2005. p.89-91
- 王敏東・蘇仁亮・許巍鐘。日治時期医学專業領導人小伝—小兒科專業—。台湾日本研究2009；3：47-77
- 王敏東。影響台湾医学的日本人 日治時期各科之領導者。台北：橋井文化。2011. p.10
- 『読売新聞』<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
- 『ヨミダス歴史館 人物』<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

(本稿で論じた医学史の著書をここに再掲しない。)